

(4). 仙台市内の原始時代集落跡の分布

仙台市内の原始時代集落遺跡（旧石器時代、縄文時代、弥生時代の各遺跡を含む。）は現在までに49遺跡が確認されている。しかし、このうち発掘調査によってその実態のごく一部が明らかにされつつあるものは、三神峯遺跡の他に、富田の上野遺跡、大野田六反田遺跡、山田船渡前遺跡くらいで、後は全く未調査のままで、しかも市街の膨張などのため破壊の危機に瀕しているものが少なくない。これらの分布は、図によって見る通り仙台市西南部、名取川流域に著しく偏っていることが一見して伺える。この点に関しては、①昭和46年～昭和49年にかけての宮城教育大学考古学研究会の「名取川水系分布調査」の実施ならびに報告などによって、仙台市西南部での集中的な分布調査が行われ、新たな発見例が増加したこと、②仙台市中心部は古くからの市街化の進展のため集落遺跡の保存の余地が見られなかったこと、③仙台市北部は、戦後の急激な開発ブームのためほとんど事前のチェックもされずに遺跡発見の可能性が奪われてしまったこと（鶴ヶ谷団地、中山ニュータウンなど）、④仙台市東部は標高10m以下の海岸平野で、従来こうした低地には弥生時代遺跡を除けば原始時代集落は形成されにくいとの認識が定説化されてきた、などの理由を指摘できる。このほか名取川流域は、仙台市西南部において3段におよぶ発達した河岸段丘を形成し、南面し湧水豊富な地味において、原始時代集落遺跡の立地基盤としては他の地域よりも比較的優位にあったことも付加しておいてよいと思われる。時期別の遺跡数の内訳としては旧石器時代1、縄文時代46（早期4、前期2、中期13、後期4、晩期6、時期不詳15）、弥生時代7である。（一遺跡で時期の複合するものは別々に数えた。）もちろん、これらはほとんどが遺物の表面採集を主体とする分布調査にもとづくデータであって、今後の調査の進展いかんによっては異なるデータが提示される可能性を十分に含むものである。数の面から見れば、旧石器時代～縄文時代早、前期までの遺跡数は合計して7ヶ所できわめて少なく、縄文時代中期にはいり圧倒的な遺跡数の増加を見ている。縄文時代後期に至っては4ヶ所と急激に少なくなるが、晩期、弥生と漸増する。こうした問題は文化程度の発展段階といった要因の他に、環境変化といった要因も加味して考え合わせなければならない問題であろう。これら各時期の遺跡の立地上の問題点などについて次に考えてみたい。

旧石器時代の遺跡としてははっきり認定されているのは現在のところ青葉山遺跡1ヶ所だけで、これは仙台市内では最上部段丘である青葉山段丘上に立地し、標高は200mに達する。縄文時代早、前期においても標高70m以上の高所で、比較的周辺地域と独立した、やや小規模の段丘上もしくは丘陵上に立地するものが多い。縄文時代中期にはいるとやや低地志向の形跡が見られ、標高30m前後の平坦な丘陵にも遺跡の形成が見られる。従って遺跡規模も大きくなり、富田上野遺跡などは標高30m、面積約30haにも及ぶ小高い丘陵上に位置している。しかしこの段階においてもなお、丘陵もしくは中位以上の段丘上に立地するものがほとんどである。縄文時

代後期にはいると、低地、それも標高10m程度の下部段丘もしくは沖積平野に立地するものが多いことが最近の発掘調査の進展などによって明らかになってきた。この点は従来の分布調査のみによるデータからは、ほとんど指摘されなかった問題点で、縄文後期の遺跡数が前代の中期に比して圧倒的に少ないのもこの点に大きな原因があるものと思われる。つまり、これら沖積地における縄文後期の生活文化層は地表からの深さ2～3mに位置することが多く、地表面探査ではほとんど確認不可能なのである。しかも、これら縄文後期生活文化層の上部に弥生～奈良、平安ごろまでの二重、三重にわたる生活文化層の累積が見られるケースもたびたびあり（長町西台遺跡、大野田六反田遺跡など）、これら上部生活文化層にカモフラージュされて縄文後期生活文化層の確認まで至らなかったのも大きな原因である。逆に考えれば、縄文後期以後の沖積作用の進展の度合いが激しかったともいえる。いずれにしろ、縄文後期に至り初めて、一部ではあるが、沖積地を立地基盤とする集落形成が見られるようになり、その間に環境変化ないし生活文化内容の変化があったことを伺わせる。今後、沖積地における縄文後期以後の遺跡数の増加を見ることはまちがいないところであろう。

縄文晩期の遺跡としては現在のところやはり小高い丘陵上に位置するものが多いが、今後、沖積地における発見例も増加するものと思われる。

弥生時代の遺跡としては、標高10m以下の沖積地に立地するものと、70m以上の高所に立地するものとが数的には半々である。しかし、前者はその規模において広範な範囲を占めるに対し、後者は狭少な立地を示し、内容的に異質なものと考えるべきであろう。

最後に、貝塚分布について、ふれておきたい。仙台市内では、海岸線に面していながら現在までのところ、縄文時代はもとより、原始、古代を通じて貝塚は全く発見されていない。言うまでもなく、仙台湾沿岸地域は全国でも有数の貝塚密集地帯として著名であり、隣接市町においてもかなりの貝塚が確認されている中で（塩釜市35、七ヶ浜町25、松島町15、名取市9、岩沼、多賀城市各3＝以上「宮城県遺跡地名表」昭51、による）、きわめて対照的な「貝塚空白地帯」とも言うべき状況を呈している。この点は、やはり地形環境の問題が最大原因と考えるべきであり、松島湾岸のような入江状の地形が容易に形成されず、貝類の採取に不適當であった反面、河川や山林などの資源の豊かさが、海岸資源への依存をそれほど必要としていなかったとも考えられる。

以上、原始時代集落遺跡の分布を通じていえることは、ごく一般的に考えられていることではあるが、地形および環境、特に河川との関わりに強く結びついていることであり、そうした中から仙台の伝統の芽生えが始まったのであり、引いては「杜の都仙台」のあけぼのを探る上で貴重な教訓を提示するものといえよう。

